

巻頭言

民俗学、民族学のいずれの分野にあっても、今から九〇余年前に書かれたフレイザーの『金枝篇』は、古今東西を問わず人類の信仰について書かれた最も基本的な図書のひとつとして、今なお多くの示唆をわれわれに与えずにはおかぬ。

これは一三巻に及ぶ膨大なものであるが、著者はこの本を広範囲な読者のものとするために自ら簡約本一巻を編集出版している。それが永橋卓介氏によって訳出され、『岩波文庫本』五冊となって市販されているので、誰にも安価に容易に入手することができる。

既に『金枝篇』を読まれた方も多いと思われ、今さら何事と言われるであろうが、『日本の石仏』誌第一八号の特集として予定されている「作神と石仏」に大変に参考となる書物なので、敢てここに持ち出したわけである。「作神と石仏」という特集については、何を書いたらよいか迷われている方もあるが、会の意図するところは、既に第一六号の一〇二頁に書いたとおりである。その中で「各種の石仏・石神の中から、生産的要素だけを、像容・銘文・伝承などの中から抽出して記述していただくと思います。」と書いたが、さらに「それとともに作神そのものの基本的な信仰を概説した原稿も是非お願いしたいと思います。」と記したのは、戦前までは農民が数的にも質的にも国民の中核をなしてきたわが国にあっては、多彩な信仰の究極が五穀豊饒に連なること、五穀豊饒祈願は日月清明・風雨順時を始め、作物の成長・結実を助長する神への信仰と、これを妨

げる邪神を駆逐する信仰の二つに分れることは周知のとおりである。その各々がどのような祭式を成立させ、信仰の対象としてどのような石神・石仏を生んだかを、地方地方の会員の手によって明らかにしたからにはかならない。

石神・石仏といった具象的なものは、信仰が衰えてもなお世に残るし、われわれはそれを直接の素材として民族の信仰を明らかにすることを当面の目的としている。しかしながらその作神の祭式は、例えば年中行事といわれるものにも多々窺われ、むしろそれが年中行事の主流とも考えられるが、戦後の農法の急速な進歩によって、作付制限といった制約もとられるにいたり、農民の増産意欲には大きな戸迷いが現われているのが現状である。こうした世相は石神・石仏の廃棄にまでつながることはないが、年中行事を始め、祭り自体をほとんど廃絶に追いやり、このまま推移すると間もなくそれを知る手懸りを失なうにいたるであろう。しかしながら今刻々失なわれつつあるものはその実、日本民族の精神構造は勿論、自然観・人生観を知りうるかけがえのない資料である。フレイザーも『金枝篇』の第一版序文の中で「事実、原始的アーリア人は、その精神的素質と組織について言えば、絶滅してはいないのである。彼は今日なおわれわれの間にいる。教養ある世界を革新した知的・道徳的なもろもろの大勢力は、ほとんど全く農民を変えることができなかった。彼はその秘められた信仰において、ローマやロンドンがいまある場所を大森林がおおいつくし、リスがたわむれあそんでいた時代の、その祖先たちとなら異なるところがないのである。」と述べられている。今後国民の生業や社会がどのように変化しようとも、数千年来植物の成育とその運命を共にしてきた精神構造がひっくりかえるとは思われないのである。

しかし将来それに気づいて、先人の具体的祭式の事例を探そうと思っても、このままでは不可能となりかねないのである。石神・石仏と民間信仰の祭式は不可分のものである。形骸化した石神・石仏を子孫に遺さないように、今可能な時代に一つでも多くの事例を書き記しておくべきであろう。石神・石仏にこだわらず作神への基本的信仰並びに祭式について、どんな断片でも寄せられたい。作神の意は生産神と読み替えられて、漁撈は勿論のこと、人間の産育にまで及ぶべきものであろう。(大護記)

巻頭言

「遠い親戚より近くの他人」といい、あるいは「向う三軒両隣」という。

千名の会員に成長した日本石仏協会も、北は北海道より南は鹿児島まで、四六都道府県にわたり、会員それぞれの志向するところも実に千差万別である。出来るだけ会員各位ご満足をいただくようにと、機関誌『日本の石仏』の編集は勿論のこと、夏季石仏講座、年六回の石仏調査旅行に、理事会としては細かく心をつかっているつもりであっても、時折々の会員の方々の声を拝聴すると、必ずしも皆様のご要望に応えているとばかり言えないことを痛感する。それも膝を突き合わせて話してみる、お互いに誤解があったり、不可抗力ということに気づいて「とにかくお互いに頑張りましょう、会員のための協会なのだから」ということになるが、なるべく忌憚のないところを披瀝し合って、お互いになつとくのいく運営をと思うが、なかなか膝を突き合わせる機会の得られないのが現状である。

こうした時、比較的近くの会員が寄り合って話し合う意義の大きさが考えられる。支部の結成がそれである。協会としては目下のところ県単位程度の支部を考えているが、それもあくまでも便宜的なものであって、これにこだわる必要はあるまい。既に昭和五十三年に先ず群馬県支部が、続いて埼玉県支部の結成をみている。千葉県支部が一昨年結成したかに見えたが、支部長の個人的理由で実を結ばなかったのは遺憾であった。その頃静岡県支部の試案が示されたが、地域的に片寄りがありすぎ

たので、再検討をお願いしたまま今日に至っている。本年中にこの二県が地区会員の総意を十分に反映して新たに発足されることに大きな期待が寄せられている。

こうした形とは別個に、比較的会員の稀薄な山陽・山陰をまとめた「中国支部」結成の動きが、一部有志によってぼつぼつみられつつあることは、同様な条件にある九州や東北の問題でもあり、ご高配を願いたいところである。現に広島県だけでも既刊の会員名簿によると二〇人の会員がおられるし、周辺の県を合わせれば四〇人になるし、逐次増えつつあるので、可能性は十分に考えられるところである。

支部の場合、「支部便り」等によって連絡をとり合うことは結構なことであるが、本誌『日本の石仏』も支部便りの欄を設けることになっているので、これを利用されることを第一に考えていただきたい。支部の意義は、同じ志を持っておられる会員相互が、近くに居ても顔も知らない、話をしたこともないというのでは淋しいことで、向う三軒両隣が、機会をみては顔を合わせるところにあらう。まして「近くの他人」でなく、近くの同志であつてみれば、顔を合わせればそこに共通の話題が生まれ、個人個人の研究にもお互い力になりうることは明らかである。同好の士が何人でも集まって語り合う、いっしょに調査に出かけられるその楽しみと意義は言うまでもなからう。

支部は勿論その地区会員によって結成され、運営されるものであるが、なるべく支部会員以外にも門戸を開放されることが望まれる。群馬・埼玉の両支部とも、年間六回程度の日帰りの調査旅行を実施しているが、たまたまその地区の調査を希望される会員には、支部会員以外でも参加が認められるように、なるべく早目に企画されて、『日本の石仏』誌上に発表していただきたい。この際支部費を払っている方よりも、若干の負担を加えていただくことは当然であらう。

群馬県支部においては、既に他県の方の参加を得て、かなり広範に石仏旅行を実施しているし、埼玉県支部でも本年度よりこの方針になっている。

(大護記)

19号 (1981.9)

巻頭言

近頃あちこちで、郷土史講座をはじめ、老人大学や公民館などの定期講座で、石仏の話をする機会が益々多くなっている。それだけ世間の石仏に対する関心が高まっている証拠で、ご同慶の至りに耐えない。

話しをしてみて感ずることは、参会者の興味が、こうした場合、石仏を通じてそれらを造立し、拜んできた人々の心根がどんなものであったかにあることは、それが信仰の所産であるだけに当然のことであるが、それとともに、いまだき今時の人間は何故石仏造立をしなくなったのか、またそれらの前を通りかかって手を手を合わせようとする人がほとんどないのはどうしたことかという疑問を抱いている人が、案外に多いということである。

なるほどこれは、石仏に向うときの最も基本的な関心事であるはずだが、われわれの態度は、この素朴にして、しかも最も基本的な石仏の問題について、どうも素通りしてきすぎていたのではあるまいか。

学問というものは、その対象・素材をできるだけ冷静に客体視して、分析し総合して考察すべきものであろう。しかし石仏という信仰の所産を対象とする場合、それを造立し、それを崇敬する人々の心をぬきにして、何を知らうとするのであろうか。石仏の様式分類や、石工の手法とした儀軌、それぞれの教義の研究の必要性はいうまでもないが、それに終始したとき、ともすれば造立者や崇拜者の心情が置きざりにされかねない。

協会の石仏旅行や、会員の個人としての調査は、当然ながら像容に焦点がしぼられる。ことに儀軌を逸脱したような像容、何物とも判断のつきかねるような石仏の前に立ったとき、興味はいっそうあおられる。これらの興味を通じて次第に石仏調査への関心が深まる。アルバムの厚さの加わっていく喜び以外にお互い^いに得るところのあるのはいうまでもない。

しかしそれが研究ということであったなら、研究とはいったい何であろうかと考えざるをえなくなる。先人は無けなしの財布の底をはたいてまでも造立の意慾をもやし、敬けんな心を持って手を合わせてきたのに、今時の人には何故それが見られないのであろう。百年、二百年の間に、そんなにも人間というものは変っていくものであろうか。

農業の普及によって作物の病虫害の大方は絶滅できる、医薬の普及によって人はより長寿を保つことができるようになった。それのみか過剰米を抱いて減反政策が云々され、人間の高年齢化が大きな社会問題となりつつある昨今であるが、それが信仰の減退につながるとしたら、それこそ信仰とはまことにたわいないものということになる。

石仏を造立した先人にくらべて、現代人がはるかに安心立命の境地にあるのであろうか。事実はどうもその逆であるように思われてならない。身を磨り^すへらして働いてきた老人が、じつと石仏の前にしゃがんでしわくちやの手を合わせている姿は、現代人に見られない心の安らぎを見ることができるといえる。

庶民信仰というか、民間信仰には、実に理屈にあわな^いたわいのないものがすくなくない。しかし先人はそれに寄りかかることによって、安らぎを得てきたことも事実である。「鯛の頭も信心から」というが、寄りかかるものがあることは、弱い人間にとつての大きな強味であった。

「石仏と現代人」これにじっくりとりくんでみることも、石仏研究の大きな課題ではなからうか。寄りかかるうとしない、寄りかかるものが無い、これが現代病というものかもしれない。

巻頭言

近年石仏写真展が各地で活発に開かれるようになったことは、まことに喜ばしいことである。

この秋だけでも、新しく会員になられた「写壇太陽」の主宰者井上清司氏が八月六日から日本橋の小西フォトギャラリーで、次いで十月には八日から長谷川聰子氏が六本木の東京ペンタックスギャラリーで、十二日からは小坂泰子氏が永田町の銀花コーナーギャラリーで開かれた。両氏ともに当初からの有力な会員であり、会場には多くの本会々員の顔が見られた。

井上清司氏はさすがにこの道のプロだけあって、石仏写真の世界では、石が極端に色と光を吸収し、反射し、危険の伴ないがちなカラー写真を見事に完成し、一つの新しい世界を見せられた。長谷川聰子氏の「花と道祖神」は、女性らしい感覚が豊かに盛られ、小坂泰子氏はモノクロ中心に、石仏の造形美を、女性とは思えぬ力強さでがっちりとらえられ感銘を深くした。十一月二十六日から同じく会員の西倉市太郎氏が、浦和の埼玉会館で、また十二月十九日から松本市で宮島津一氏の「天狗たちの石仏」という写真展が開かれました。その他各地において、私は拝見の機会を得なかった石仏写真展が、今年も多かったことと思われる。

人それぞれに石仏に志向する姿勢はさまざまであるが、石仏というものを対象とするかぎり、これを写真に納めることが基本であり、しかも石仏に心をひかれるからには、誰しも「自分で見、自分でよしとする石仏の世界」を十分に描き出そうとす

る意欲を持つことは当然である。

この秋の叙勲で勲三等瑞宝章を受けられた作家の村上元三氏は直木賞の選こうに当って「何を書くか」としているか。人間が描けているか。その時代が書けているか。」を基準にしているが、それはまた自分がペンを執る時のものさしとしておられるという。このことは石仏写真の世界にもあてはめられるものではなからうか。

石仏に向って、その石仏の何を撮ろうとするのか、それを写しとるにはどのようなアングルを選ぶべきか、石仏をとりまく信仰空間をどのように生かし且つ整理するか、私は常にこのことを考えてシャッターを切っている。それが資料写真としてであつても、このことは不可欠の要件であらう。

石仏があつたからその前に廻ってシャッターを切った。今時のカメラではそれで十分に写る。石仏もある、背景も入っている。しかしシャッター以前に何をそれに感じ、何を撮しとろうかのはっきりした姿勢のない写真は資料としても不足であり、況して人を説得しうる写真にはならない。時にまぐれということもあるが、それは人の心をうつことはすくないであらう。石仏を愛し石仏に心ときめかすことのない者は、石仏にカメラを向けようとはしないであらう。人それぞれの見るところ、感ずるところはさまざまであり、それを写しとる姿勢もまた同様であつて、どれを是とし、どれを非とすると早計に決めてかかることは不遜のそしりを免かれぬであらう。私はこうあるべきものと思う。こうしたゆき方には賛同しかねると考えることもまた自由であるが、それを主張し、他人に強いることは慎むべきものと、私は思っている。

石仏を絵に描くことも、本会会員の杉山徹氏をはじめ逐次ふえつつある。石仏の絵となると写真と異なり、より鮮明に主張が画面を掩っている。そこに石仏の絵の世界がある。しかし写真においてもそのことは重要であり、決してその前に行けばカメラが写してくれるというものではなからう。

卷頭言

路傍の石神・石仏の前に立つと、この石像は数百年という永い歳月をじっと同じ場所に立ち、あるいは座ったままで、何を見、何を聞き、どんなことを感じてこられたのだろうかということを、問いかけてみたくなるものである。

紀年を見ると、たしかそのころこの地域でも風水害や冷害で凶作が続き、餓死者が出たそうだが、その供養と再びそのような被害を受けないようにと祈念して造立されたものと思われるが、当時の状況はどうだったのか。その後も何回となく天災に襲われたり、疫病が流行したようだが……。病気の平癒や安産祈願、子供の生長を祈ったり、旅に出かけた人や戦争に行った人の無事を祈るなど、村人たちが入れ替り立ち替りやって来て、さまざまなお願いをしたと思うが、どんなことが多かったかなど、聞きたいことはいくらかもあるけれども、石像は一向に答えてくれないのである。

当たり前ではないか、石像が口をきくはずがないと、現代社会においては、極めて合理的な答えが返ってくるであろう。これがむしろ当然なのかもしれないが、なんとも味気ないことと言わざるを得ない。

科学の発達と経済の成長で、たしかにわれわれの生活は物質的に恵まれたけれども、反面心に満たされぬものが多くなっている。そんなことを感ずるようになった矢先に、ふと目にとまった石仏に足を止め、その魅力に心ひかれて、以来石仏の虜^{とりこ}になった人びとが多いのではないだろうか。

それは恰も、わが国の高度経済成長が早いテンポで進展している時期と、いわゆる石仏ブームなどといわれる現象が、そのきざしを見せ始めたのがほぼ同じ時期であったことが、これを物語っているといえよう。

石像や石碑は石を刻んで造立した「物」に相違ないが、石神・石仏に関心を寄せる人びとは、視点の違いはあっても、単なる「物」として見ている人はほとんどいないはずである。その点では、これを村の辻に造立した昔の村人は勿論、これを受け継いで信仰してきたその子孫たちと全く同じであるが、なんといっても大きな違いは、われわれは見て歩いてカメラを向け、調査する対象であるのに対して、村人たちは、極めて切実なる動機と靈験に期待して造立した、信仰の対象であるということである。

村人たちは、自分たちの村、自分たちの集落の石神・石仏を数百年このかた、悩みや苦しみを訴え、嬉しいことがあったときには早速知らせて感謝するなど、最も信頼し、お互いに気心の知れた相手として信心し、対話を続けてきたのである。

そこへ他^{よそ}所者の私などがこのこ出かけて、石神・石仏と話をしたいなどといっても、村境に立って、ここを出入りする人びとを監視している塞の神は、気心の知れぬ者には口を閉じて目を光らすに違いない。

しかし、私はなんとか対話をしたいのである。というのは、石神・石仏と村人たちの対話を聞き取ることによって、村人たちの心とか生活の変遷が明らかになると思うからである。これらは文書にあまり記録されていないことであるし、これまでの歴史がほとんど取り上げなかった、庶民の過去を知る極めて大切な資料のひとつであるということである。

私は石神・石仏との対話は、石像そのものの調査と同時に、これまで石神・石仏と対話をしてきた村人たちから聞き取ることでと思う。この村人たちも容易に胸襟を開いてくれるものではない。そのためには村境に立つ石神・石仏が、安心して迎え入れてくれるような態度で臨まねばなるまい。そして数多く対話した古老たちが元気なうちに、少しでも多く聞き出しておきたい、村を離れて都会に憧れる若い人が多いだけに、この人たちにも一緒に聞いてもらいたいと思うのである。(胡桃沢友男記)